

アル・パーディの詩における「過去」

— "The Country North of Belleville"を中心に —

松 田 寿 一

カナダの詩人・作家マーガレット・アトウッド (Margaret Atwood, 1939-) はアル・パーディ (Al Purdy, 1918-2000) を特集したビデオのインタビューの中で、「カナダ人は過去というものにある種の強迫観念を抱いており、自分がどこにいるかを確かめるために常に過去を読み直し、再発見しては、掘り下げ続ける」(*A Sensitive Man*) と語った。確かにパーディにとっても「過去」は重要な意味を持っている。とりわけ60年代初頭からは、「過去」を探ることを主題とした作品が次々と発表されるようになる。

60年代と言えば、「カナダのテーマ」や「カナダの精神風土の独自性」を模索する英系カナダの文化的ナショナリズムが盛り上がりを見せ始めた時代である。ケベック問題、地域主義、先住民問題など国内に分裂の不安や矛盾を抱えながらも、隣国アメリカの経済的・文化的侵略に抗してのカナダのアイデンティティ問題が真剣に問われるようになったのである。カナダ平原州出身のロバート・クロウチ (Robert Kroetsch, 1927-) は、ポストモダニズムの作家・詩人としての立場を明確にする前に、「私が学んできた歴史は私の住んでいる世界を説明していなかった」と述懐し、「新しい国であなたはどのようにかくのか」という問いを立てたことがある (Kroetsch, 1-2)。パーディにとっても「名付けられていない周縁の国カナ

ダ」の歴史を自らのことばで名付けていくことは重要な課題であった。また60年代後半には、アメリカ文化流入の加速、アメリカの対外政策などに対してカナダ人作家たちの意見や批判をまとめた『新しいローマ人』(*The New Romans*, 1968)を編集するなど、カナダの文化的ナショナリズムの中心的存在ともなったパーディにとってカナダの過去に目を向けるのは当然のことでもあった。しかしパーディの過去への執着はそうした一時期に限られたものではない。70年代後半からのナショナリズムの衰退、それと入れ替わるかのように到来した多文化主義の時代にあっても、「過去」という問題はパーディにおいては依然として大きな位置を占め続ける。とすれば、「過去」というものは彼のより深いところにある永続的な感情と関わるのではないか。

本稿では、パーディにとっての「過去」の意味を、詩「ベルヴィルより北の国」("The Country North of Belleville")を中心とする60年代から70年代の作品を通して探してみたい。なおパーディはカナダを代表する現代詩人の一人だが、日本ではなじみがないと思われるため、末尾に手短かな略歴を付した。

I

パーディ自身が語るところによると、自らの詩の声と呼ぶべきものを見出したのは『すべてのアネットに捧ぐ』(*Poems for All the Annettes*, 1962)、さらに『カリブーの馬』(*The Cariboo Horses*, 1964)においてだったという(*Reaching*, 177)。このときパーディはすでに40歳代半ばに到達していたが、付記したような「修練時代」を経て、ようやく自在なスタイルで語りかける独自の自由詩への成熟を見るのである。声の発見とともに重要なのは、これらの詩集以降、明確に「過去」という問題をテーマに定めた一連の詩が発表されるようになったことである。前者には、「カナダ人のアイデンティティについて」("On Canadian Identity")と題するカナダに

固有な歴史や伝説の存在をシニカルに検証した作品や、先住民への悲愁の漂う「インディアン部落の廃墟」("Remains of Indian Village") が収められる。後者には表題詩の「カリブーの馬」("The Cariboo Horses")、
「ロブリン製粉所」("Roblin's Mills")、そしてこれから取上げる「ベルヴィルより北の国」(*Cariboo*, 74-6) などが含まれている。付記したように、パーディの詩集には、さまざまな題材が万華鏡のようにちりばめられ、いくつもの声が響き合う。しかしオンタリオ州南東部の荒れ地に入植した祖先の苦闘を綴ったこの詩に流れるのは、哀切な挽歌 (elegy) の調べである。まずは全体で約90行のこの詩の冒頭部分を引用してみたい。

Bush land scrub land —

Cashel Township and Wollaston

Elzevir McClure and Dunganon

green lands of Weslemkoon Lake

where a man might have some

opinion of what beauty

is and none deny him

for miles —

Yet this is the country of defeat

where Sisyphus rolls a big stone

year after year up the ancient hills

picnicking glaciers have left strewn

with centuries' rubble

backbreaking days

in the sun and rain

when realization seeps slow in the mind

without grandeur or self-deception in
noble struggle

of being a fool —

(灌木の土地 低木林の土地—／カジュアルそして ウォラストン／
エルゼヴィール マックルーア ダンガノン／ウェスレムクーン湖の
緑の土地／そこは 美とは何かを／知るに至るところ／見渡す限り否
定する者も／いないところ—／／しかし ここは敗北の国／シシュポ
スが古代の山々に／幾年も岩を押し登り／気ままに流れ下った氷塊
が／数世紀の瓦礫をまき散らしたところ／日に晒され 雨に濡れた／
苦難の日々／打ち負かされるというだけの／高貴な戦いの中で／尊大
に構えることもなく 自己を欺くこともなく／真実がいつしか心に滲
みていくところ—)

最初に連呼されるのは、ベルヴィル市から北に広がるカナダ楯状地
(the Canadian Shield) に点在し、かつて多くのロイヤリスト (王党派)
とその末裔が入植した土地の名である。パーディの祖先もそうした移住者
へと辿ることができるという。句読点のない詩行、句跨り、微妙な韻の響
き、語句の反復などによって生ずるリズム、さらにダッシュによるフェイ
ドアウト、哀傷を漂わせながらもどこか叙事詩的な趣きのある書き出しで
ある。

パーディの自伝『ボーフォート海を目指して』(*Reaching for the Beaufort
Sea*, 1993) によれば、ベルヴィルから国道62号線を北へ向うとこのよう
な開拓地跡が目に入ってくるという (*Reaching*, 172)。おそらくはスコッ
トランド、アイルランドにゆかりの名と思われる土地は緑に覆われている。
しかしここは、今では訪れる人もなく地名だけが墓標のようにひっそりと
残された「敗北の国」なのである。パーディはさまざまないきさつの後、
1957年に郷里に近いベルヴィル市郊外のアメリカズバーグ

(Ameliasburgh) 村に移り住んでいる。引きつけられるかのように周辺の歴史を探り始めたのはその頃のことである。

アメリカ独立革命後、イギリス植民地カナダへと逃れた約5万人のうち、およそ3分の2はノヴァ・スコシアに渡ったと言われるが、アッパー・カナダ（現在のオンタリオ）へも1万人ほどが移住したという。ロイヤリストにはあらゆる階級、職業、宗派、人種、地域の人々が含まれており、イギリスを支持した理由もさまざまであった（木村, 121-2）。しかし彼らのほとんどが農夫でなかったことだけは確実で、荒寥とした北の地で再出発をしたのである。平地に位置するベルヴィルでさえ、原野・森林を切り開いての農地の開墾は厳しいものであったが、北に入植したものたちの生活はさらに苛酷であった。フロンティア精神に裏打ちされたヒロイックな姿とはほど遠く、愚かしいほどのひたむきさで耐え忍びつつ、彼らは生き残ろうとした。アメリカでの敗北、そして新しい土地における苦難—この詩の匿名の語り手である吟唱詩人はそうした彼らに「シュシュボス」を重ね合わせ、かれらの営みに普遍的な意味づけをしようとする。

次の節では、石を掘りよけながら、荒れ地に挑むひとりの男の姿が描かれる。

A country of quiescence and still distance
a lean land
 not like the fat south
with inches of black soil on
 earth's round belly —
And where the farms are
 it's as if a man stuck
both thumbs in the stony earth and pulled

it apart
to make room
enough between the trees
for a wife
and maybe some cows and
room for some
of the more easily kept illusions —

（ここは 静止したときが はるかに広がる遠い国／痩せた土地／豊かな南とは違い／大地のまるい下腹に／数インチの黒土だけが覆っている一／農場とは名ばかりで／そこはまるで一人の男が／石ころだらけの土の中に／両親指を押し込んで石を取り出し 選り／／分けながら／木々の間に／妻と／たぶん幾頭かの牛と／さらに／はかない幻のための／ささやかな居場所を作るところ—）

自伝の中でパーディはその後のベルヴィル市周辺の歴史についてもふれている。19世紀から20世紀の変わり目に、政府はオペオンゴ街道（the Opeongo Trail）を敷いて、ベルヴィル市の北に位置する北ヘイスティング郡（the northern Hasting's County）の開拓を奨励したという。多くの人々が地価の低い土地を求めて入植した。しかしカナダ楯状地の岩肌が所々にむき出しになっているような場所では、森林を伐採したあとに使えるのは、ほんのわずかな土地だった。生活ができるほどの収入は得られない。まして、入植のために借りた費用も返済できず、まるで「雑草で覆われたゲッター」（'a grassy ghetto'）のような地での生活を彼らは強いられた（*Reaching*, 172-3）。ここは「豊かな南とは違う」土地なのである。

「豊かな南」とは、ベルヴィル市やオンタリオ湖周辺の土地のことだろう。パーディはベルヴィルから北の地方に住む人々に対して特別の感情を抱いていた。彼らは一様に南の人たちより貧しいが、ある種のエートスを

持っており、彼らの間にはまだ、友愛や相互扶助といった人間として賞賛すべき精神性が感じられたという (*Reaching*, 156-7)。生活は苦しく、自然は苛酷だが、北に住む人々には失われた何かがある—ここに、カナダ人がしばしば「北」に対して抱くイメージを思い起こすこともできる。「南」に対しての「純粹、無垢な北」「文明に侵されていない北」という、ある種ロマンティックな憧れと言えるイメージである。しかし北極圏に近いバフィン島を舞台にした詩集『北の果ての夏』(*North of Summer*, 1967)では、息をのむほどに美しい極地の自然とともに現代文明に浸食されつつある現実のエスキモーの生活もリアルに描かれる。パーディの「北」に対する感情は複雑だが、少なくとも「北」は「豊かな南」と対峙し、「南」を批評する視線として捉えられている。

パーディの詩が過去を振り返るとき、現在の時間の中に祖先の幻影がつかと現れることがある。当時、パーディと親しく手紙を交わしていた作家マーガレット・ロレンス (Margaret Laurence, 1926-87) がパーディの詩の中で特に共感していたのが、死者たちの声が耳元で囁き、時間の彼方から訪れた誰かが実際にそこに佇んでいるという不思議な感覚だった (Lennox, 90-1, 317)。現在を透いて死者の作業を間近かに見つめているかのような描写 (「石ころだらけの土の中に／両親指を押し込んで石を取り出し／選り／／分けながら」)、男のこころの中にすべり込むようにして知り得たかのような「はかない夢」についての語りには、そうした気配がかすかに漂う。それは最後の「イリュージョン(幻) (illusions) という語によって醸し出されるイメージの喚起力にもよる。

見方を変えればどこか薄気味悪いこの感覚は、『野ブドウのワイン』(*Wild Grape Wine*, 1968) 所収の「荒野のゴシック」("Wilderness Gothic") のように、われわれの現実を覗き見る、古いアルバムに幽閉されたかのような「陰気な先祖たちの顔」(52) や、『たそがれのサンダンス』(*Sundance at Dusk*, 1976) に収める「製粉所の中で」("Inside the Mill")

における、「閉鎖された古い製粉所の仕事場でいまだに幻影となって作業を続けている先祖たち」(21) としても現れる。パーディにとって現在の中に生き続ける過去とは、文字通り身体的に感応することのできるものなのである。

詩集『カリブーの馬』の「亡霊を呼びよせる方法」("Method for Calling Up Ghosts") は、こうした感覚や想像力の意味について語る詩である。この詩はカナダ詩人アール・バーニー (Earle Birney, 1904-95) の詩「カナダ文学」("Can. Lit.") の一節「私たちに取り憑いている思いとは／取り憑くはずの当の亡霊がないことなのだ ('it's only by our lack of ghosts / we're haunted')」(Birney, 49) のエコーであろう。しかしバーニーにとって亡霊とはホイットマンやディキンソンのような文学的祖先のことであり、カナダ詩人はその不在に思い悩む。一方パーディが呼びよせ、その存在を合法化しようとしているのは、カナダの名もない死者たちであり、その証人としての風景や場所なのである。

しかしやがて開墾は失敗し、人々は去り、農場は見捨てられ、すべては「森へ、もとの自然へと還って」いく。

And where the farms have gone back
to forest
are only soft outlines
shadowy differences —
Old fences drift vaguely among the trees
a pile of moss-covered stones
gathered for some ghost purpose
has lost meaning under the meaningless sky
— they are like cities under water
and the undulating green waves of time

are laid on them —

(そこは農場が／森へと還っていったところ／今はただ ならかな
輪郭で／うっすらとそれを跡づけるだけ—／古い囲いは木々の間にぼ
んやりと漂い／潰えた夢のために集められた／苔むした石の積み重ね
は／亡霊のように うつろな空の下で意味を失っている／—それらは
水面下の街のよう／うつろう「とき」という緑の波が／それらの上に
広がっている—)

子音 [f][s][v] などのかすかに踏まれた韻の響きと相俟って、ここにも過去の幻影が行間から忍び寄るような感触がある。また、反復し、意味の共鳴し合う詩句や行の流れに哀感の漂う一節である。マーガレット・アトウッドが『サヴァイヴァル』(*Survival*, 1972) の「開拓の失敗」と題した章で引用するのは上記の部分である。アトウッドはそこにカナダ人が好む精神のパターンを読みとり、次のように述べている—「『開拓者』という主題からカナダ人が作りだしがちな詩とはロサンゼルス的高速道路、あるいはその類の情景を写して終わりとするのではなく、四角い、そして四隅のしっかりした農場が捨てられ、再び大自然が支配するようになるところで結末となるらしい。」(*Survival*, 123) アトウッドはパーディのこの作品に、自作の『スザナ・ムーディの日記』(*The Journals of Susanna Moodie*, 1970) の主題にも通じる、開拓者がもたらそうとする直線的なもの(「囲い」=「秩序」)が最終的には曲線的なもの(「荒野」=「自然」)に敗北する典型を見出している。

しかし敗北を予見しながらも農夫は耕し続ける。そして次行冒頭で代名詞'their'は'our'へと転換され、「彼らの生」は「われわれの生」に接続される—「ここはわれわれの敗北の国／されど また／秋蒔きの季節には／畑を掘り起こしながら男は／褐色の畝に立ち止まる／(中略)／幾年も幾年も／10エーカーほどの野を耕しながら／年老いて耕す／「とき」のめぐ

りがいつしか心のめぐりと重なるまで」('This is the country of our defeat / and yet / during the fall plowing a man / might stop and stand in a brown valley of the furrows / ... / and grow old / plowing and plowing a ten-acre field until / the convolutions run parallel with his own brain 一')

2語で行を占める「されど また」('and yet') から、「耕す『とき』のめぐりがいつしか心のめぐりと重なるまで」('until the convolutions run parallel with his own brain') に至る一節で、語り手はその地で演じられた苦難の意味を掬い上げようとする。この節では [au][ou] などの二重母音が低く反響するが、'plowing and plowing' という言葉は、あまりに長きに亘ったパーディの「修練時代」などを思い起こせば「書き続けること」と読み重ねることも可能だろう。いずれにせよ、彼らの生は未来に伝えられなくてはならない。しかし語り手はそれには悲観的だ。「ここは若者たちが／すぐに立ち去って行く国」であり、彼らは「父の知ったことは知りたくないから／母が黙した意味を探りたいとは思わないから」('And this is a country where the young / leave quickly / unwilling to know what // their fathers know / or think the words their mothers do not say 一') である。彼ら入植者たちは未来においても敗北しているのだろうか。

最後の節では再びいつくしむように地名が唱えられていく。ここでも [l][k] などの子音の微妙な押韻、行替えやダッシュの余響効果が際立っている。

Herschel Monteagle and Faraday
lakeland rockland and hill country
a little adjacent to where the world is
a little north of where the cities are and

sometime
we may go back there
to the country of our defeat
Wollaston Elzevir and Dungannon
and Weslemkoon Lake land
where the high townships of Cashel
McClure and Marmora once were —
But it's been a long time since
and we must enquire the way
of strangers —

(ハーシェル モンティゲル そしてファラディ／湖の土地 岩の国
土 そして丘陵の国／世界があるところには少しばかり隣接して／市
街地があるところからは少しばかり北寄りで／そして いか／われ
われはそこに戻るかもしれない／われわれの敗北という国へと／ウオ
ラストン エルゼヴィール ダンガノン／ウェスレムクーン湖のある
辺り／そこはかつてカシェール／マックルーアやマルモラという開拓
地のあったところ—／しかし あれから長いこと経ってしまって／わ
れわれは道を尋ねなければならない／見知らぬ人に—)

II

パーディの詩における「過去」という問題を探るにあたり、この詩がど
う捉えられてきたか、二、三の例からおこしていきたい。

パーディの死後に刊行された選詩集『記憶の彼方へ』(*Beyond Remembering*, 2000)の編者で、『最後のカナダ詩人—アル・パーディ論』(*The Last Canadian Poet—An Essay on Al Purdy*, 1999)の著者サム・ソレッキー (Sam Solecki, 1946-)は「ベルヴィルより北の国」を、マーガレット・ロレンスの「マナカワもの」(‘Manakawa novels’)、マーガレット・

アトウッドの詩集『スザナ・ムーディの日記』や小説『浮かび上がる』(Surfacing, 1972) などとともに、カナダ人のアイデンティティを主題とした60年代から70年代の国民文学の代表的作品と位置づける (Solecki, 147)。その上でソレッキーが主張するのは、多文化主義を推進する現在のカナダにおけるパーディの詩の今日的意味である。しかし伝統や文化的諸価値を共有する国家としての「ネーション」がその求心性を失い、単なる政治上の国家 (state) に過ぎなくなりつつあると憂うソレッキーの立場からは、それはカナダの現在に対する諫言としての意義なのである。ソレッキーは次のように言うー「カナダ的な経験と歴史は1967年から『多文化主義法』が制定された1988年で終わりを告げた。それは文化的・政治的力、国内外からの圧力によって法制化されたが、すでにピエール・トルドー (Pierre Trudeau, 1919-2000) 首相による1971年の多文化主義を支援する姿勢によってカナダのアイデンティティは変質し始めた。国家としてのカナダは変わらないとしても、ネーションは別のものにとって代わったのだ。」(Solecki, 3-4) このようにソレッキーにとって「ネーション」とは、共有された記憶の上に作り上げられた共同体以外の何ものでもないから、カナダの過去を掘り起こすパーディの詩はカナダの現在を見直すために大きな意味を持つことになる。

一方、パーディの『記憶の彼方へ』に序文を寄せたマイケル・オンダーチェ (Michael Ondaatje, 1943-) は、この詩を念頭に置きながら、「カシュール、アメリアズバーグ、エルゼヴィール、ウェスレムクーンといった地名がミシシッピ川やストランド街に並ぶものとして文学地図上に書き込まれたのはパーディによってなのだ」(Beyond, 19) と述べている。パーディの一連の詩によって、カナダ辺境の歴史的・風土的体験が名付けられ、普遍性が与えられたとして、「命名されていない土地」の名付け親としてのパーディの功績を讃えるのである。

しかし「名付ける」という点に限れば、60年代以前にもそうした衝動が

見られないわけではない。例えば55年に出版された『砂の上に記されて』(*Pressed on Sand*)の「さすらい」("Meander")と題する作品には次のような一節がある—「ぼくはフレーザー川のどの岩にも／刻まれている ひとつの物語を見つけ出して 書き留めよう／上手な詩ではないかも知れない。／でも誰かがルーパートのインディアン村の船着き場について／書かなくちゃならない (中略)／誰も気に留めることもない／取るに足りない些細な出来事を」('I will find a story in every rock / Along the Fraser, write everything, / Perhaps not well. / But someone has to write about the Indian dock / At Rupert, ... / The minutiae and trivia that people think / Is unimportant.')(11-12)

パーディは、当時カナダの詩人たちにも影響を与えつつあったW.C.ウィリアムズの詩を必ずしも評価してはいなかったが、奇しくもこの詩は『パタスン』(*Paterson*, 1946)の「土地への誇り」('a local pride')や「個々のものから／出発しよう」('To make a start, / out of particulars')(*Paterson*, 3)といった有名な詩句を想起させる。パーディの60年代以前の詩とそれ以降の詩を分け隔てる特色の一つは場所に対する感覚であり、それに伴うカナダの地名の出現である。そして土地の名を唱えることは、記憶の霧の片隅から、忘れられた祖先を甦らせることでもあった。「ベルヴィルより北の国」のように地名を過去の歴史的体験と結びつけ、メタファーにまで高めるには及ばないとはいえ、「さすらい」にはカナダの土地を名付けようとする意識は明確に表われている。

しかし「名付けること」と関わって取り上げたいのは、アトウッドのこの詩に対する発言である。アトウッドは先のインタビューで、この詩の根底にある感情について次のように語っている—「永遠に続くものなどはない、留まるものなどないのです。パーディの詩にはいわゆる挽歌と呼ばれるような詩がたくさんあります。それらのいくつかは彼の生きてきた時代の中であまりにカナダが変わってしまったということも関係しているかも

しれません。』

確かにパーディが青少年期を過ごした「飢餓の30年代」(Hungry Thirties)から、この詩が書かれた60年代までに、カナダ社会は急速な変貌をとげた。人口の密集した都市が板ぶきの小さな集落に取って代わり、科学技術はめざましく社会システムを変え、地方から都会へ人口が移動し、大量の移民が流入した。アトウッドは続けてこう語る—「そうした中で、すべては解体し、消失していくものなのだと感じられていくのです。『ベルヴィルより北の国』はそれをみごとに要約した作品なのです。」つまりこの詩が伝えるのは、英系カナダ人の歴史を通して導びかれた、およそ人間、そして人間が作り出すものは所詮はかないという感慨なのだと言うのである。

アトウッドが指摘する人間の生のはかなさという感情は確かにパーディの本質に関わる。単純に詩中、あるいはタイトルに現れる関連語句を拾い出しも'transient' 'fading' 'temporary' 'brief' 'momentary' 'meaningless' 'ghost purpose'などが即座に浮かぶ。意識的に捜し出せば膨大な数になるだろう。また最後の詩集『パリへはもう再びは』(*To Paris Never Again*, 1997)の詩の一節には、人間のありようは「地球の上の／仮住まい」('a brief residence here / on the earth') (113)に過ぎないとある。しかし「死すべきもの」としての人間、そして人間的な一切に対する脆さとはかなさについての認識はすでに初期の頃から見られたものでもある。『砂の上に記されて』の表題詩の冒頭では、「砂に記された手の跡に生身の手はない。／寄せる潮のような時の中では／誰ひとり不死の肉体をもってして／この世へ這い戻れたものはいなかった」('I see no hand in the hand shape pressed on sand; / No men in the tide-walking of time could / Clamber from phoenix flesh') (3)と綴られ、「時」に敗北する肉としての人間の運命が描かれるのである。

このようにパーディは生涯を通じて、塵に還る存在としての人間のはか

なさや頼りなさを強く認識していた。では「ベルヴィルより北の国」でパーディが「過去」を振り返るのは、人間のはかなさや共同体の盛衰を描くためからなのか。

ここで思い起こされるのはパーディにとってのヘロドトスの存在である。ギリシアの歴史家ヘロドトスに親しみを感じていたパーディは、「ハリカルナッソスのヘロドトス」("Herodotus of Halicarnassus")をはじめ、ヘロドトス自身や、『歴史』を下敷きにしたと考えられる作品を多く残した。そのヘロドトスにおいて「はかなさ」は、「過去」を記録しようとする行為、すなわち歴史記述の動機と深く結びついている。

ドイツの歴史哲学者カール・レーヴィット (Karl Löwith) によれば、ヘロドトスは歴史をキリスト教的歴史観のように救済の前史として、あるいは近代の歴史哲学者のように未来を基礎づけるものとしては捉えておらず、いわゆる世界史の意味について考察したのではないと指摘した上で、次のように述べる—「何故かれがペルシャ戦争の事実を、すなわち行為ならびに出来事一般を、報告するのを価値あることと考えたのか。(中略)ヘロドトスは、簡潔に人間を『死すべきもの』と呼ぶ国語をもったギリシア人だけに、一切の人事の脆さとはかなさについて純粋な、深い意識をもっていたので、過去の世代の大きな出来事や行為を後世のために保存する必要がある、『ヒストリーエ』なしではどんな偉大な行為も忘却に委ねられてしまうであろうと考えたからである。(中略)ヨーロッパの歴史の父たるかれは、ペルシャ戦争の歴史を書くに当たって、自分がそれを報ずるのは『死者が人間から時と共に失われ、偉大な驚嘆すべき仕事が世に知られず消えて行くことがないようにするためだ』という文章で書き出している。してみるとヘロドトスは一切の人事の無常さに一種の不滅性を保証しようとしたのである。人間は神々の不死の生命と自然的コスモスの永遠の循環にあずからないから、その行為は、死すべき者たる人間よりも生き延びるためには、歴史を必要とする。」(レーヴィット, 96-7)

パーディにとって「ベルヴィルより北の国」の中の死者たちは、辺境カナダのさらに北辺の地で「石ころだらけの土の中に、両親指を押し込んで石を取り出し、ささやかな居場所を作る一人の男」であり、「年老いて、『とき』のめぐりが心のめぐりと重なるまで野を耕し続ける男」であった。しかしその男はおそらくシュシュポスのように驚嘆すべき仕事に携わっていたのである。その営みは忘却されることがないように書き留められなければならない。たとえそれが「誰も気に留めることもない／取るに足りない 些細な出来事」(*Pressed*, 11-2) のように思われても、記述することによって「不滅性を保証し」、その意味を基礎づけ、神話化することさえ必要なのだ。それによって「木々の間にぼんやりと漂う古い囲い」や「苔むした石の積み重ね」が「時」に対する彼らの抵抗の証しとなりうるのである。しかしここで読者はためらいを覚えずにはいられない。パーディは本当にそう信じていたか。そんな思いもまた「はかないイリュージョン(幻)」('easily kept illusions') に過ぎないと打ち消そうとしたのではないか。なぜなら、詩は曖昧なまま閉じられているからである—「いつかわれわれはそこに戻るかもしれない／しかし あれから長いこと経ってしまつて／われわれは道を尋ねなければならない／見知らぬ人に—」。

III

個人としての「はかなさ」という感情を克服するものとしては別な道もあったかもしれない。人間の有限性に打ち克つものとして、あるいは生の意味や根拠といったものに答えるものとしての宗教の存在が考えられる。パーディは宗教、特にキリスト教をどのように捉えていたのだろうか。

幼い頃父と死別し、カナダ統一教会 (the United Church of Canada) の熱心な信者である母親に育てられた一人息子パーディの少年時代には神はきわめて近い存在だった。少年期を回想した「雪の中で」("In the Snow") は、素朴に神を信じる無垢な少年の姿が描かれている (*Stone*, 17)。

しかし彼にとっての神のイメージは長ずるに及んで変化していく。後年彼は若い時分を回想して次のように言う―「私は基督教の神を怖れるようになっていた。神は私が毛布の下で隠れてやっていることを見抜くことができたし、私が何を考えているかなどはすぐに見通した。知らぬまに神は私の人生を支配していたのだ。壁にはプラーク（飾り板）が掛かっている、そこにはこう記されていた。『どんな会話も聞き逃すことのない見えないこの家の主人こそキリストである』」(*The man*, 78)

「毛布の下で隠れてやっていること」とはおそらく自慰行為を指していると思われるが、すべてを見通し、聞き耳を立てる神に彼は言いしれぬ恐怖を覚えるのである。壁に飾られたキリストのことばに示されるように、神はすべての行動を監視する権威の象徴となっていく。ついにパーディは次のように判断を下す―「神の導きの手に従う限り、自分の人生を生きることにはならない。他の誰かに命じられた人生を生きることになる。」(Meyer, 139) こうして彼はあるがままの自分の姿を受け入れつつ、自らの力で根本的な問題を考えていこうとする。

しかしマーガレット・ロレンスと交わした手紙の中でパーディは、「私は神の存在に関しては不可知論の立場をとるが、だからと言って宗教的思考を排除してはいない」(Solecki, 192-3)とも語る。実際パーディは伝統的な基督教に対する信仰はすでに喪失していたが、一方で宗教的な感情からは切り離されてはいないのである。『パリへはもう再びは』に収める「ニムルド・ダグの神々」("The Gods of Nimrud Dag")は、古代アッシリア王によってトルコ南東部の山頂に建造されたニムルド・ダグ神殿跡に座する神々の像、とりわけ岩盤に直に据えられた頭部だけの巨大な石像群の林立に圧倒されて書かれたという。その一節を引用すれば―

"... You look and begin to understand
now the way the old ones felt then,

when a graven image belched fire,
and a spirit presence touched your face.
These were the gods of our fathers:
they are not to be dismissed from our lives,
even if we worship no longer at their shrines
—an unused part of the brain knows them,
when the priests' chanting dies
and the moon silent on the silent mountain." (*To Paris*, 30)

(見つめるおまえに伝わり始める／彫像が火焰を吐き／神霊が面にふれた
ときの／いにしえ人の祈りの意味が。／ここには父祖たちの神々がいる。
／彼らがわれらの生から放逐されることはない／たとえ今は僧たちの祈り
は絶えて 山月が黙し／われらはもはや祭壇に向かうことがないとしても
／—使われていないわれらの脳の片隅には／神々の記憶が残っている。)

このように、たとえキリスト教の神には頼らないとしても、脳の片隅に残る遠い祈りの記憶、宗教的な感情への憧憬はパーディの中に存在し続けたのである。

IV

人間の行為に不滅性を付与するための歴史記述、慣習的な宗教を否定しつつも宗教的なものへ惹かれる思い、祖先や過去へと向うまなざし、それらはパーディの中でどう結び合っているのだろうか。

イギリスの社会学者アントニー・D・スミス (Anthony D. Smith) の『ネイションとエスニシティー—歴史社会学的考察』は、近代のナショナリズムとエスニックな紐帯と歴史の記憶との関係を論じているが、「ネイション」と「郷愁」との関わりについて言及した箇所はこの点について示唆を与えると思われる。スミスはまず過去への郷愁は、あらゆる時代、あらゆる

る社会に見られた現象だとした上で、「それはいつも人間が、死を克服し、死が生あるものを脅かすむなしさを克服しようと望んでいるからにはかならない」と述べる。そして「人間は自分の存在を忘却から守るための手段として自分自身を宗教的共同体に結びつける」という。なぜなら「共同体の伝統にしたがって生きることによって、来世や現世で救済される可能性に望みをたくすことができ」るからである。確かに宗教的共同体の伝統と生活様式が守られている社会では過ぎ去った昔に憧れる必要などはない。しかし信仰が薄れる時代になると「永遠なるものを、宗教とは別のところに求めはじめ。」ではどこに拠り所を求めるのか。スミスは次のように説明する—「多くは子孫という考えの中に、それを見いだす。人間の行為が続けられ、記憶が生き生きと保たれるのは、子孫中であり、子孫を通じてである。けれども人間の行為や記憶が意味をもつのは、茫漠とした霧の中の祖先から、そうした祖先と同じように未知の子孫へと、連綿とつながる鎖のなかにおいてである。」つまり「生が無意味になったとき」、あたかも『宗教の『代替物』』として、過去から未来へとつながる連続性を求めるというのである（スミス, 207-8）。従って、有限性を克服して永遠を得たいがためには人間は過去を必要とする。子孫の記憶を通じてこそわれわれの永遠があるとすれば、過去に立ち戻らなくてはならないのである。スミスは次のようにも言う—「子孫の記憶のなかにこそ、私たちの希望がある。そのためには、以前の父祖たちのように、私たちの物語も書きとめられ、『歴史』とならなければならない。」(スミス, 243) すなわち、私たちが生き残るためには、私たち自身もまた語り継がれる必要があるのである。

パーディは70年代半ばに郷里の歴史を掘り下げながら自身のルーツを辿る長編詩『オーエン・ロブリンを探し求めて』(*In Search of Owen Roblin*, 1974) を出版した。写真家ボブ・ウォラー (Bob Waller, 1948-) による当時の人々の姿や風景を写したモノクロのスナップが各所に施されたこの

詩集は、繻くものの記憶を再生させ、過ぎ去った祖先たちの世界への郷愁を駆り立てる。しかしそこには未来への継承も意図されている。しばしば引用される80頁を越えるこの詩集の末尾は次のように記されている—「すべては放棄され／打ち捨てられ／忘れられた／しかし彼らはかつてそこにいた／われらが拠って立つべき場所を残して」('all things laid aside / discarded / forgotten / but they had their being once / and left a place to stand on')

「はかなさ」を克服するためにパーディが求めるのはこうした連続性なのではあるまいか。ここには明確なメッセージがある—祖先と子孫とは世代を越えた鎖に結ばれている。そしてそれは、無名の人々の「過去」が名付けられ、われわれの生きた「現在」となり、「未来」へと更新されることによって可能になる。

アトウッドの最初のことば、「カナダ人は自分がどこにいるかを確かめるために常に過去を読み直す」を思い起こせば、「私たちは誰か」という問いに答えるには「私たちはどこにいるのか」、そして「誰とつながっているのか」を知る必要があるということである。だが「ベルヴィルより北の国」の場合はどうか。確かにこの詩を通して、祖先の堪え忍んだ日々と生活を改めて生き、それによって歴史と運命によって結ばれた共同体を意識することはできるだろう。しかし「ベルヴィルより北の国」にはそうした連続性に対して懐疑的な思いが示されているのではないか。

「ベルヴィルより北の国」が書かれてから40年ほど経った現在のカナダは、パーディの文化的ナショナリストとしての側面を強調する『最後のカナダ詩人』の著者ソレッキーにとっては憂慮すべき多文化主義の時代にある。1997年に出版されたパーディの最後の詩集『パリへはもう再び』に添えられた「故国」("Home Country")と題するエッセイで、パーディはカナダの未来についてこうふれている—「カナダという国が、私がここで回想してきたような国として今後もあり続けてほしいと思う。時の流れ

とともにわれわれとは遠戚でしかなくらいに人々の姿や形は変わるだろうが。それでもやはりカナダ人は存在しているだろう。しかし、通りで見かけても分らないくらい別の人間になって。(中略)カナダの大地もまた残っているだろう。われわれは形を変化させ、はかない命を生き、進化の途上にある生き物なのだ。」(*To Paris*, 127)。

この一節に見られるパーディのアンビヴァレンスな感情は明らかに「ベルヴィルより北の国」の終末部、「いつか われわれはそこに戻るかもしれない／しかし あれから長いこと経ってしまっ／われわれは道を尋ねなければならない／見知らぬ人に一」に通底している。こうしてみるとパーディは晩年に至るまで、歴史的共同体の連続性を希求しながらも、その願望は常により深いところにある「はかなさ」という感情、言うなれば、悲観主義・懐疑主義の影につきまといわれていたと言わざるを得ない。しかし70年代後半以降のパーディの詩に目を向ければ、逆にその悲観的感情が特定の「ネーション」像に基づく文化的ナショナリズムを相対化するシニカルな視線を保持せしめたのではないかとも思われるのである。

実際その後のパーディにとっての祖先とは、英系に限らず、仏系、インディアン、メティス（インディアンと仏系カナダ人との混血）、さらにそのような人類という枠はとうに越え、進化論的に遡り、あらゆる生物の層にまで広がっていく。地名もまた英仏系から、彼が旅した地球上のさまざまな地域や場所が記され、最後にはインディアン、イヌイットの土地の名が詩に刻まれていく。最晩年の詩「その名を唱えよ」(“*Say the Names*”)の大半は、先住民に由来する地名の連禱であった(*Beyond*, 579)。しかしすべては「はかないイリュージョン(幻)」('easily kept illusions')なのだと感じるとパーディの一面を考えると、連続性を夢み、また土地の名を唱えながらも、すでにその行為の無効性を予期していたようにも思える。つまり最後に残るのは地名ですらなく、地形だけなのではないかということである。

アトウッドはインタビューの中で「カナダ人にとって過去はつい最近のものであると同時に、はるか遠いものでもある」とも語っている。確かにカナダでは、つい何世代前の白人入植者の生活空間の下には、インディアンのティピ（北米平原インディアンの円錐型のテント）の跡があり、それをめくれば氷河の地質学的太古がむき出しになる。「ベルヴィルより北の国」の一節に、「気ままに流れ下る氷塊」（'picnicking glaciers'）と「苦難の日々」（'backbreaking days'）が対比的に並ぶ行があるが、それは人間の歴史とは所詮、大地という羊皮紙に書き込まれ、やがて消し去られるほどのものでしかないというパーディの心情をかい間見せるものなのだろう。

付記（アル・パーディの略歴）

パーディは1918年オンタリオ州南東部の小村ウーラー（Wooler）に生まれた。父親とは幼い頃に死別、敬虔なクリスチャンの母親の手で一人息子として育てられた。高校を中退し、大恐慌の余波の残るカナダ各地をホーボー（渡り労働者）として放浪。貨物列車を乗り継ぎながらカナダを見て回ったことは、後年カナダ的な経験を詩に「作図」していく際の原体験ともなった（パーディはそうした地図作製の作業を'mapping'あるいは'cartography'と表現している）。

1940年にカナダ空軍に入隊。1944年に処女詩集『魅せられたこだま』（*Enchanted Echo*, 1944）を自費出版するが、独学の徒で、他の詩人たちとの接触もない当時のパーディは、ロマン派やヴィクトリア朝詩人、あるいはブリス・カーマン（Bliss Carman, 1861-1929）らの、ややマイナーなカナダ詩人の影響を受け、詩集も感傷的な内容を伝統的な英詩のスタイルにまとめ上げた作品が多くを占めた。しかしこの頃譜んじた韻律は、彼が自由詩へと移行した後も、ときおり詩行に亡霊のように出現することがある。サム・ソレッキーは、そこにパーディの詩の進展における定型詩の継承を認め、それは過去と現在の連続性というパーディのヴィジョンを無意識に示すものだという傾聴すべき論を展開している（Solecki, 49-76）。

除隊後は、タクシー運転手、工員などさまざまな職に就き、労働組合の仕事にも携わる。このようにアカデミズムとは無縁な生活の中で詩作を続け、カナダモダニズムの動きからも孤立していたが、55年に出版された『砂の上に記されて』（*Pressed on Sand*）以降のいくつかの作品には変化の兆しが現れる。「さすらい」（"Meander"）と題する作品では、カナダという国を名付けることを意識し始めた

パーディの姿が見える。また目線も町工場や都市の裏小路といった自身の現実の生活の場へと移り始める。

55年にそれまで勤めたヴァンクーヴァーのマットレス工場を辞めるが、後にこのことが自分の転機になったと回想している (*Reaching*, 190)。「自分自身であること」、そして人生を十全に生き抜くことだと決意をし、詩作、読書に没頭する。ディラン・トマス、W.B.イェーツ、W.H.オーデン、ロビンソン・ジェファーズ、D.H.ロレンスらの作品にふれることによって、徐々に内容、スタイルを変革していくが、モントリオールのモダニズム詩人アーヴィン・レイトン (Irvin Layton, 1912-)、マルクス主義的ナショナリスト詩人ミルトン・エイコン (Milton Acorn, 1923-86) らとの親交がパーディにカナダのアイデンティティの問題を意識させるきっかけの一つとなったと想像される。

57年に郷里に近いベルヴィル市近郊のアメリカズバーグ村のロブリン湖 (Lake Roblin) 畔に廃材を集め、小屋を建て、妻子とともに移り住む。極貧の中、詩作、文筆に打ち込み続け、ようやく62年、『すべてのアネットに捧ぐ』 (*Poems for All the Annettes*, 1962) をもって評価を受け、続く『カリブーの馬』 (*The Cariboo Horses*, 1964) でカナダ総督賞を受賞し、長い「修練時代」に幕を閉じる。この頃、後にアメリカの徹底的な肉声・口語詩人として名を馳せる詩人チャールズ・ブコウスキー (Charles Bukowski, 1920-94) と文通、後年書簡集が出版された。その後、『アル・パーディ全詩集』 (*The Collected Poems of Al Purdy*, 1986) で再び同賞を受賞、文字通りカナダを代表する詩人となった。この間、カナダ国内はもとより、キューバ、北極圏、広島、旧ソビエト、ガラバゴス諸島、中近東、メキシコなどを旅し、多くの作品を残した。カナダの「土地の声」 (Voice of the Land) とも称された彼は、平原州の詩人たちをはじめ、カナダの若い世代の詩人たちにも大きな影響を与えた。

最後にパーディの詩の声についてひと言付け加えたい。「パーディはシェイクスピアとヴォードヴィル (寄席芸人) の喜劇役者を行き交って詩を書く」 (*Second*, 98) とのマーガレット・アトウッドの評言にもあるように、パーディはしばしば悲劇と喜劇、真面目と滑稽を往来する。またブコウスキーと接点があることから察せられるように、初期には俗語、罵倒語の類もよく使われた。つまり詩の主題によって声色が変わるため、詩集によっては、下層労働者の愚痴から国民的オードを思わせる声調へと広域の声が鳴響する。そこにパーディにおけるポリフォニー性やバフチンのダイアログにつながる面を読み取る批評家もいる。従って今回取上げたような挽歌風 (elegiac) に謳うパーディに彼の真正な声を聴くとする評者が多いとはいえ、それもまたパーディの声のひとつ過ぎないと心に留めておく必要はある。

引用文献

- Atwood, Margaret. *Survival*. Toronto: McClelland and Stewart, 1972.
- . *Second Words*. Toronto: Anansi, 1982.
- Birney, Earle. *Ghost in the Wheels*. Toronto: McClelland and Stewart, 1977.
- David, Jack & Robert Lecker, eds. *Essays on Canadian Writing* no.49 (Summer 1993) Al Purdy Issue.
- Kroetsch, Robert. *The Lovely Treachery of Words*. Toronto: Oxford University Press, 1989.
- Lennox, John, ed. *Margaret Laurence – Al Purdy: A Friendship in Letters*. Toronto: McClelland and Stewart, 1993.
- Meyer, Bruce & Brian O'riordan, eds. *In Their Words*. Toronto: Anansi, 1984.
- Purdy, W. Alfred. *Pressed on Sand*. Toronto, The Ryerson Press, 1955.
- Purdy, Alfred. *The Cariboo Horses*. Toronto: McClelland and Stewart, 1965.
- Purdy, Al, ed. *The New Romans*. Edmonton: M.G. Hurtig Ltd. Publishers, 1968.
- Purdy, Al. *In Search of Owen Roblin*. Toronto: McClelland and Stewart, 1974.
- . *The Stone Bird*. Toronto: McClelland and Stewart, 1981.
- . *A Sensitive Man*. (Video) National Film Board of Canada, 1988.
- . *Reaching for the Beaufort Sea*. Madeira Park, BC.: Harbour Publishing, 1993.
- . *To Paris Never Again*. Madeira Park, BC.: Harbour Publishing, 1997.
- . *Beyond Remembering – The Collected Poems of Al Purdy*. Madeira Park, BC.: Harbour Publishing, 2001.
- Purdy, Al & Gary Hyland. *No One Else Is Lawrence!* Madeira Park, BC.: Harbour Publishing, 1998.
- Solecki, Sam. *The Last Canadian Poet: An Essay on Al Purdy*. Toronto: University of Toronto Press, 1999.
- Williams, Carlos William. *Paterson*. New York: New Directions Books, 1946.
- アントニー・D・スミス著、巢山靖司他訳『ネイションとエスニシティ』名古屋大学出版会、1999年。
- カール・レーヴィット著、柴田治三郎訳『世界と世界史』岩波書店、1959年。
- 木村和男編『カナダ史』山川出版社、1999年。